

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24年 5月23日現在

機関番号：34101

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720080

研究課題名（和文） 源氏物語本文に関する伝承と本文変容の連動性について

研究課題名（英文） The study of linkage between Tradition and Modification of *The Tale Of Genji*

研究代表者

中川照将 (NAKAGAWA TERUMASA)

皇學館大学・文学部・准教授

研究者番号：20410920

研究成果の概要（和文）：本研究では、現在一般的に読まれている『源氏物語』の歴史的意義について再検討した。この作品には、同じ“源氏物語”の名を有しながらも内実を異にした様々な源氏物語が存在していた。本研究では、そうした同名異体の源氏物語に着目し、成立から約200年後には既に本来の形態がわからなくなってしまうとされる本作品が、「作者最終稿」という概念のもとに変容し、現在の形態へと固定化されていくまでの過程を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：I have reviewed historical significances of *The Tale Of Genji* currently read by general public, which led us to find out there were some versions different from original contents even though they had names of *The Tale Of Genji*.

In my study, we took a close look at these kinds of different versions and we disclosed the way and process how the original version of *The Tale Of Genji*, which is said it lost the original version 200 years after the compilation, had made itself currently recognized stereotype version under the condition, "The the final authoritative manuscript".

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2009年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 2010年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 2011年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 1,700,000 | 510,000 | 2,210,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：源氏物語、青表紙本、藤原定家、池田亀鑑、奥入、異文、本文校訂、享受史

1. 研究開始当初の背景

(1) 「紫式部の最終稿」という幻想

シェイクスピアの研究者ワースティンの論旨について、金子雄司は次のようにまとめている。—「作者の最終稿」という理念上の形は、書誌学者・本文批評家のそうあってほしいという願望にすぎない。—彼の主張は、

源氏物語を考える上でも重要な指針となるだろう。なぜならシェイクスピアの作品のみならず、源氏物語においても、作者紫式部の自筆本は現存しないからである。そもそも現在私たちが読んでいるのは、既に原本の形態がわからなくなっていた鎌倉時代に、藤原定家によって編纂された『源氏物語』であった。

ワースティン流に言えば、現在の『源氏物語』とは、紫式部の「最終稿」ではなく、藤原定家の「そうあってほしいという願望」が具体化されたものにほかならないことになる。

(2)「藤原定家の最終稿」という幻想

源氏物語について考える上で押さえておかなければならない問題は、もう一点ある。それは現在の『源氏物語』の源流ともいべき定家編『源氏物語』に関しても、わずか数帖しか残っていないという点である。現在、私たちが手にする『源氏物語』は、室町時代に書写された大島本をもとにしている。この伝本は、池田亀鑑によって藤原定家の「最終稿＝青表紙(原)本」に最も近いものとして認定されたものである。しかし1980年代の阿部秋生・片桐洋一の研究以降、池田が提示した「大島本＝定家最終稿」という図式は大きく揺らぎはじめる。つまり「大島本」もまた、池田の「そうあってほしいという願望」が具体化されたものであったことが明らかになってきたのである。

(3)淘汰された源氏物語に光を！

各人々が抱く「願望」というフィルターを通して徐々に現在の形態へと固定化されてきた『源氏物語』。しかしその裏には「理想」に合致しないという不当な理由によって淘汰されてしまった不幸な同名異体の源氏物語たちが存在していた。忘れてならないのは、そうした淘汰された源氏物語もまた源氏物語であるということ。そしてその裏の源氏物語をも視野に入れてこそ、はじめて本作品の物語としての本質が見えてくるということなのである。

2. 研究の目的

本研究は、源氏物語の注釈書に見える異文に関する注記(＝本文に関する伝承)を手がかりに、本来は多様な形態を有していたはずの源氏物語の本文が、一つの術語・概念のもとに「淘汰／統合」されていく過程(＝本文変容)を解明しようとするものである。

(1)《青表紙本》という術語と淘汰された定家本

①《青表紙本》とは、藤原定家が長年の研究の末に作成した、たった一つの最終稿を指す術語である。しかし定家関わった源氏物語は複数存在し、かつ最終稿の実態も、わずか二百年後には既にわからなくなっていたことが確認されている。鎌倉～室町時代に作られた源氏物語注釈書には、現存する青表紙本伝本からは窺い知ることのできない数多くの定家本本文が記されている。なぜそれらの

本文は姿を消してしまったのか。まずは、かつては確実に存在していながら、時代とともに姿を消してしまった定家本の存在を確認する必要がある。

②現在、池田亀鑑が打ち立てた青表紙本系統・河内本系統・別本群の三分類に対して全面的な見直しが行われつつある。これらの研究は、現存する諸伝本の関係性について、文献学的処理の徹底化を通して再構築することを目的としている。しかしこの方法にも限界がある。なぜなら一つ伝本が作成されるということ、それ自体が既に作成者の「理想」に規制されたものだからである。例えば青表紙本の場合、各伝本の作成者は、数多くの伝本の中から、彼らの考える「理想」の《青表紙本》を底本として選んでいた。書き入れを施す人に関しても同様である。つまり作成時において既に取捨選択がなされている諸伝本の関係性をどれほど客観的に分析しようとも、それらは「理想」という名の主観のつながりでしかない。本研究が着目する“淘汰された本文”は、青表紙本伝本が「今その形で残っていること」、それ自体の意味を浮かび上がらせるものでもある。

(2)《作者》《作者の最終稿》という術語と淘汰された源氏物語

①淘汰という現象は、本文以外の面でも確認できる。その最も典型的なものとしては、巻数の問題がある。物理的に失われたものを除くすべての源氏物語伝本は、必ず54帖で構成されている。これは、鎌倉時代以降に定着した“『源氏物語』＝54帖”という常識のもと、平安～鎌倉時代には源氏物語の一部として読まれていたはずの「桜人」等の巻々が不純なものとして取り除かれてしまった結果に他ならない。

②それにも関わらず、現在の研究では「現行『源氏物語』＝紫式部最終稿」という前提のもとに議論が行われ、またそれ故に議論自体が噛み合わないといったことが数多く見られた。物語を論じる上で、どこまでを事実と認定し、どこからが推論とすべきなのか再検討する。

3. 研究の方法

(1)本文分別基準の歴史の変遷について

先にも述べたように、定家関わった源氏物語は複数存在し、かつ最終稿の実態も、わずか二百年後には既にわからなくなっていた。ならば、当時の人々はいかなる方法で正統な定家本(＝青表紙本)を判別したのか。その最も重要な基準として認識されていたのは、定家自筆本(もしくはその転写本)であるか否かであった。その他に用いられた基準

として予想されるのは、以下の2点である。

①本文の形態に関する基準

『源氏物語』本文の識別に関しては、一種のマニュアルともいべきものの存在が知られている。「源氏物語青表紙定家流河内本分別条々」(書陵部蔵『源氏談義』)が、それである。これは、青表紙本と河内本を見分けるポイントとなる箇所を、1巻つき1~2箇所ずつ掲げ、本文の相違を示したものである。こうしたマニュアルの存在は、当時の人々が本文の分別に際して、現代のように全文の異同を一字一句厳密に調べていくのではなく、各巻ごとにポイントとなる箇所のみを調べ、それを判断基準にしていたらしいことを示唆するものである。ならば、そのポイントとは、どこにあったのか。その点を分析するには、まず鎌倉時代以降に作成された源氏物語の注釈書から異文に関する注記を摘出し、それらの情報をデータ化していく。

具体的には、鎌倉~室町時代に成立した主要な注釈書(『紫明抄』『河海抄』『仙源抄』『花鳥余情』『弄花抄』『細流抄』『孟津抄』『岷江入楚』)を対象とする。

この試みは、既に池田亀鑑「青表紙本・河内本相違に関する古注釈の説」(『源氏物語大成』1953年)においてもなされている。ただし、池田の主な考察対象は、各注釈書に現れる「青表紙本」「河内本」の語、もしくは両術語のもとに位置づけられてきた異文であった。本研究では、池田が考察対象としなかった単なる異文注記、即ち青表紙・河内両本間の差異として認識されていない異文注記をも採録の対象とする。古注釈において青表紙・河内両本間の差異として指摘されているものの中には、かつては“単なる異文”としてしか認識されていなかったものも存在するからである。

本研究が導き出すデータは、“単なる異文”が“青表紙・河内両本間の差異”へと変容していく過程を浮かび上がらせるものである。

②伝本の形態に関する基準

青表紙本伝本の中には、各帖末に、藤原定家が作成した注釈書(=奥入)を備える伝本が存在する。池田亀鑑は、この形態的特徴を備えていることこそが、真の《青表紙(原)本》であることの証と認定した。しかし、『源氏物語事典』「諸本解題」(東京堂出版1960年)によると、同じ奥入を備える伝本でも形態の異なる伝本の存在が知られ、池田説が再考されるべきものであることは明らかである。

まずは鎌倉時代以降に作成された注釈書、並びに日記等をもとに、奥入に関する伝承を収集し、そこから正統な《青表紙本》との関連性を分析していく。

以上の2つの分析を通して、《青表紙本》と認識された本文の変容と《非・青表紙本》と

して淘汰されてしまった本文の実態を解明する。

(2)現行『源氏物語』への固定化について

①1950年代に議論が高まった『源氏物語』成立論について再検討する。武田宗俊「源氏物語の最初の形態」の論旨とそれに対する反論の内容について整理し、議論が紛糾することになった原因について〈作者〉〈最終稿〉という概念から再検討する。

②現行『源氏物語』とはあまりにもかけ離れた内容を有するがゆえに軽視されることの多かった注釈書や梗概書を考察する。具体的には神宮文庫蔵『源氏肝要』を調査し、他の注釈書並びに連歌や謡曲等との関連性から、現行『源氏物語』とは異なる、鎌倉~室町時代に淘汰されてしまった〈作者〉〈最終稿〉観を浮かび上がらせていく。

4. 研究成果

(1)《青表紙本》という術語のもとに淘汰された定家本の存在について

①弘和元年(1381)、南朝第三代天皇である長慶天皇が作成した仙源抄を手がかりに、長慶天皇が所持した藤原定家筆本の実態を解明し、その本文の新たな位置づけを試みた。

②従来、長慶天皇の定家筆本は「厳密な意味で青表紙本(=定家最終稿)ではない」と認識されてきた。その理由は、長慶天皇の定家筆本に、《青表紙本》であるならば有するはずのない“異質な言葉”が認められることにある。

③しかし大島本をはじめとする青表紙伝本に施された書き入れを検討していくと、その“異質な言葉”は、各青表紙伝本の校訂前本文として存在していたものであることが明らかになった。つまり長慶天皇の定家筆本に見える“異質な言葉”は、はじめから“異質”であったのではなく、その言葉が書き入れ等の処置によって他の青表紙伝本から抹消されることによって、結果的に“異質な言葉”であるかのように見えるようになってしまっただけなのである。

④本来『仙源抄』所収定家本は、定家の手を経ているという意味において、正統な《青表紙本》となりうる資格を有していたはずであった。それにも関わらず、その本文は最後まで《青表紙本》として認定されることはなかった。『仙源抄』所収定家本とは、現代に至るまでのあらゆる人々にとっての「そうあってほしいという願望」に合致しなかった不運な定家本であったのである。

(2)《青表紙本》における奥入の位置づけにつ

いて

①池田亀鑑以降《青表紙本》の正統性を保証する条件として“帖末に奥入を有する”点が重要視されてきた。しかしこの条件は、源氏物語享受史において、常に重きを置かれていたものではなかった。

②奥入を基準に現存伝本を一覧すると、その形態は大きく2型に分類され、更に細分化していくと計5型に分類することができる。

A【帖末に奥入を有する】

A1 [物語本文+奥入]

A2 [物語本文+別種の奥入]

A3 [物語本文+定家筆奥入奥書]

A4 [物語本文+別種の奥入+定家筆奥入奥書]

B【帖末に奥入を有さない(=奥入を別冊仕立てとする)】

B1 [物語本文] / [奥入]

興味深いのは、これら5種類の源氏物語は、いずれも正統な《青表紙本》の復元という意図のもとに作られていたという点である。

③過去には、現在とは異なる認識があり、すべての伝本は、その認識のもとに形成されるものとしてある。各伝本が「今その形態で残っている」ということは、必ずしもそれぞれの伝本の価値や正統性を保証するものとはならない。それぞれの形態が指し示しているのは、その形態こそが学問的に正しいと考えられていた、という事実のみだからである。

④5種類の源氏物語が存在するという点、そのこと自体が、《青表紙本》が「定家最終稿」ではなく、各人の「そうあってほしいという願望」のもとに容易に変容するものであることを示しているのである。

(3)源氏物語成立論の再検討

①武田宗俊「源氏物語の最初の形態」に端を発する成立論の意義と問題点について“作者”という概念から再検討した。

②武田宗俊が主張した[紫上系/玉鬘系]という図式、並びに自説を補強するために持ち出した根拠にはいくつかの欠点が存在していた。しかし武田が指摘する巻毎の登場人物の出入りという現象自体は、動かざる事実であり、当然認められてしかるべきであった。

③武田成立論に対しては、様々な反論が提出された。しかしその反論のほとんどは学問的ではなく、きわめて感情的なものであったといえる。その最も典型的なものが“作者”という概念を持ち出した反論であった。

④そもそも《作者》とは、読者毎に内実の異なる、きわめて流動的な概念である。そのことは、源氏物語という作品が、各時代の人々の「そうあってほしいという願望」によって改変されてきたという事実からも十分に理解されるであろう。

⑤成立論が紛糾してしまった原因は、本来何ら学問的な意義を持たない《作者》という概念を、あたかも学問的なものであるかのように使い続けたことにある。このことは源氏物語のみならず、『夜の寝覚』等の成立を論じる上でも当然考慮されるべきものでもある。

(4)神宮文庫蔵『源氏肝要』の特質・意義について

①『源氏肝要』は、記述内容から判断するに一般的な梗概書としての要素を備えている。しかし書記法の面から判断する限り、本書の位置づけはきわめて曖昧になる。神宮文庫本と内閣文庫本では和歌の書記法に決定的な差異が認められるからである。つまり本書は梗概書と物語歌集の間で揺れ動きつつ享受されてきた作品であったということになる。

②本書と現行『源氏物語』との間に見られる記述内容の差異は、必ずしも本書作者の改変によって生じたものではない。本書に見られる奇妙な記述は、同時代の注釈書・梗概書等に一般的に見られるものであるからである。つまり本書と現行『源氏物語』との差異が生じているのは、本書作者が源氏物語本体ではなく、古注釈書等の二次資料をもとに記述したことに起因していたのである。

③本書に見える奇妙な記述の中には、他書の成立・改変の問題を解決するヒントとなるものが隠されている。例えば、巻名に関する記述に関して、本書には明らかに論理的に矛盾するものが見られる。しかしこの矛盾は、京都大学蔵伝持明院基春筆本『源氏小鏡』においても認められるものであった。つまり『源氏小鏡』伝本の中で最も古態を保持しているとされてきた伝持明院基春筆本もまた既に改変の手が施されている可能性があることわかるのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔図書〕(計4件)

①中川照将、他、神宮文庫蔵『源氏肝要』の紹介と翻刻、神宮と日本文化、皇學館大学、2012年、pp443-505

②中川照将、他、『奥入』を書き加える/切り離すということ、日本古典文学研究の新展開、笠間書院、2011年、pp275-294

③中川照将、他、『源氏物語』はどのように出来たのかを考えるために[他]、テーマで読む『源氏物語』論—紫上系と玉鬘系、勉誠出版、2010年、pp1-24 [他]

④中川照将、他、淘汰された定家筆本源氏物

語一《青表紙本》形成のモノガタリ、古代文学論叢一源氏物語の言語表現研究と資料、武蔵野書院、2009年、pp220-240

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中川 照将 (NAKAGAWA TERUMASA)

皇學館大学・文学部・准教授

研究者番号：20410920

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：